

中等習字鑑  
下

K220.72  
59  
3

K220.72

59

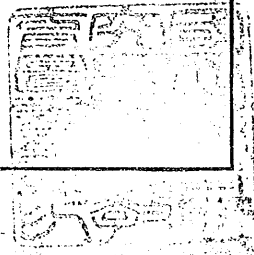
3

303  
746

書道研究會編  
日高秩父書

中等習字鑑  
下

東京元元堂書房



一、本書は明治四十四年七月、文部省新定の中學校教授要目に準  
 一、據して立案せり。  
 一、本書は、明治四十四年七月、文部省新定の中學校教授要目に準  
 一、して間架結構の順序に及び、意を安排と脈略とに注ぎ、僅少  
 一、の時間を以て、進歩の多功益を收めしめんことを期せり。  
 一、本書は、また、修身及び國語漢文諸科との聯絡を考へ、古人の格  
 一、言及び詩歌文章等の徳性の涵養に資し、文學の妙趣を會せし  
 一、むる上に裨益あるものを精選せり。而して大字は以て書法  
 一、を授け、細字及び假名は多くて實用に供せしめんことを期し、字  
 一、語共に簡易にして、清書の豫定に編纂せり。然れども時に  
 一、本書は、隔週一回、清書の豫定に編纂せり。然れども時に  
 一、り、過剰を見ることがあらん。適宜取捨せられんことを望む。  
 一、本書は、日高秩父氏の揮毫に係る。適宜取捨せられんことを望む。  
 一、課に、山口彦總氏の執筆を乞ひ、日高氏の檢閲を経たるものなり。  
 大正元年十月

一、本書の揮毫紙面は、生徒の實際に用ふる半紙大とし、其の製本は、習字科教授者  
 一、紐一般の要紙あり、所を察し、折り、本式を排して、他の一方に纏むることを得る等  
 一、最も苦心を費したり。

元元堂書房編輯部識

1.10.29  
 元元堂

第 一 課

水 火 竹 米 草  
車 金 門 馬 魚  
多 冷 竹 米 草  
車 金 門 馬 魚

第 二 課

士道に志して  
惡衣惡食を恥  
つるものは未だ  
與に議するなり  
足らざるなり

論語

士道に志して  
惡衣惡食を恥  
つるものは未だ  
與に議するなり  
足らざるなり

第三課

筑後河兩崖浩渺不  
辨牛馬天下大河利  
根為最此水次之故  
有西國次郎之號以  
配阪東太郎

齋藤竹堂

筑後河兩崖浩渺不  
辨牛馬天下大河利  
根為最此水次之故  
有西國次郎之號以  
配阪東太郎

第四課

海行かはみつく屍  
山行かは草むすか  
はねる大君の邊にこ  
そ死なぬかへりみ  
はせ

萬葉集

海行かはみつく屍  
山行かは草むすか  
はねる大君の邊にこ  
そ死なぬかへりみ  
はせ





中興偉略說  
 遊豈公少  
 亦微時是  
 牧童煙雨  
 滿村春  
 變盡可無牛  
 背出牧童

森春濤

中興偉略說  
 遊豈公少  
 亦微時是  
 牧童煙雨  
 滿村春  
 變盡可無牛  
 背出牧童

第七課

執筆有法筆管在中  
指無名指之間則兩  
指在上兩指在下是  
謂雙包準抵筆始有  
力若以單指包之單  
指抵之筆端無力

漢漢書法

朝雲 橘千陰  
旅人此路ゆく跡のひつり  
くもまぢの海を足柄乃山  
意磯浪の上を見て源實朝  
大海と碓氷もとるにふる浪は  
あれて破けてまはて散るなり

朝雲

橘千陰

旅人此路ゆく跡のひつり

くもまぢの海を足柄乃山

意磯浪の上を見て源實朝

大海と碓氷もとるにふる浪は

あれて破けてまはて散るなり

Handwritten text in cursive style, likely a transcription or commentary related to the 'Six Arts' (六藝).

壁書

徳川光圀

昔は樂の種樂は昔の種と知るべし  
主人と親とは無理なるものと思へ下人は足らぬ  
もれと知るべし  
子ほどよ親を思へ  
檢におぢよ火におぢよ分別なきものに於ちよ  
朝寝すべからば長座すべし  
小なるものは分別せよ大きなることは驚く  
處からす  
九分は足らば十分は未ほると知るべし

筑海颶風連天黑蔽海而來者何賊  
 蒙古來來自北東西次第期吞食嚇  
 得趙家老寡婦持此來擬男兒國相  
 摸太郎膽如甕防海將士人各力蒙  
 古來吾不怖吾怖關東令如山直前  
 斫賊不許顧倒吾檣登虜艦擒虜將  
 吾軍喊可恨東風一驅付大濤不使  
 羶血盡膏日本刀

賴山陽

筑海颶風連天黑蔽海而來者何賊  
 蒙古來來自北東西次第期吞食嚇  
 得趙家老寡婦持此來擬男兒國相  
 摸太郎膽如甕防海將士人各力蒙  
 古來吾不怖吾怖關東令如山直前  
 斫賊不許顧倒吾檣登虜艦擒虜將  
 吾軍喊可恨東風一驅付大濤不使  
 羶血盡膏日本刀

第十課

秀吉以桐為號以金  
 瓢為馬表每一捷加  
 一瓢曰吾必積至千  
 矣因稱千瓢織田氏  
 之出軍也桐號瓢表  
 敵望而避之

日本外史

本居宣長

志まきしまの六和

さくらを人向く

朝日に匂ふ

山櫻花

山櫻花の歌  
朝日に匂ふ  
さくらを人向く  
志まきしまの六和  
本居宣長

第十課

勤	留	動	間
務	留	務	間
封	度	封	度
對	友	對	夏
席	國	虎	國
交	圓	處	圓

勤 務 封 對 虎 處  
 留 留 度 友 國 圓  
 間 間 度 夏 國 圓



第四十課

学かく武士の子は器を幼年  
より鍛へて育つるやうに  
弱くもなきを又武名に出  
精よくするがごとく之を  
それまで死ぬほとの子を惜し  
からず候

徳川齊昭

三

学かく武士の子は器を幼年  
より鍛へて育つるやうに  
弱くもなきを又武名に出  
精よくするがごとく之を  
それまで死ぬほとの子を惜し  
からず候

霰

源實朝

衣士の美なみつらふ龍手に上り

あらまふはしる形須の志乃はひら

嵐

賀茂真淵

任流なるすかのあら野哉飛ふ龍宮の

つばきさきふもたに吹く何らし可那

蒲團着て寝たる姿や東山嵐雪  
世の中は三日見ぬ間ふ櫻哉蓼太  
時鳥鳴くや雲雀は十文字 去來  
大原や蝶の空を舞ふ松ぼら月文艸  
夏草やつはもはか夢の跡 芭蕉  
聲かれて猿の齒白し 峯の月 其角

祇園の夜櫻看むとする人は神山へと向ふもとの  
老木は枝を垂れて篝火の炎に護られ寒よりぬ  
雪も雪なき空よりまほれて顔は撲つ田樂を  
賣る聲新茶を勧むる聲この花の前後に  
山彦を返し来まり

西山の花見る人は多く御室城指す松青の樓  
門赤く茶煙の絶えくに颯まて花極めて白し  
塔は霞を洩れて松風の外に聳え鐘樓は音を  
説きて香雪の中に包まる誦經の聲遠く響きて  
鶯の歌長に高き梢に在り

雪月花

五月十六日正成乃與弟正季子正行等辭闕而西至櫻井驛正行時年十一矣正成遣歸之河內誡之曰汝雖幼已過十歲猶能記吾言今日之役天下安危所決意吾不復見汝也汝聞吾已戰死矣則天下盡歸足利氏可知也慎勿計較禍福嚮利忘義以廢乃父之忠苟使我之族隸而有一人存者則率以守金剛山舊趾以身殉國有死無他汝所以報我莫大於此因以帝所嘗賜寶刀授之訣別正行請從共死正成叱之起正行揮涕而去

櫻井驛訣別

日本外史

櫻井驛訣別  
 五月十六日正成乃與弟正季子正行等辭闕而西至櫻井驛正行時年十一矣正成遣歸之河內誡之曰汝雖幼已過十歲猶能記吾言今日之役天下安危所決意吾不復見汝也汝聞吾已戰死矣則天下盡歸足利氏可知也慎勿計較禍福嚮利忘義以廢乃父之忠苟使我之族隸而有一人存者則率以守金剛山舊趾以身殉國有死無他汝所以報我莫大於此因以帝所嘗賜寶刀授之訣別正行請從共死正成叱之起正行揮涕而去

大正十年十月廿八日發行  
 大正十年十月十九日印刷  
 中等習字體全三冊與行  
 正價各卷金拾八錢  
 濶川光行  
 渡邊八太郎  
 日清印刷株式會社  
 東京府多摩郡内藤新富北町五十三番地  
 東京市牛込區板町七番地  
 東京市京橋區元頓町三丁目七番地  
 大阪市南區心齋橋筋一丁目六十七番地  
 關西大賣捌所  
 大賣捌所  
 松村文海堂

大正元年十月十九日印刷  
 大正元年十月廿八日發行

不許複製

本接合授にし弊書  
 間多御も業品て房  
 道注有上切地出  
 に發文之御と方出  
 送備後委相賣販  
 可致下は支成捌割  
 仕居度この居書に  
 候候製直場御店に

著者 書道研究会  
 發行者 濶川光行  
 印刷者 渡邊八太郎  
 印刷所 日清印刷株式會社  
 東京府多摩郡内藤新富北町五十三番地  
 東京市牛込區板町七番地  
 東京市京橋區元頓町三丁目七番地  
 大阪市南區心齋橋筋一丁目六十七番地

正價各卷金拾八錢

發行所 元元堂書房  
 大賣捌所 北隆館書店  
 關西大賣捌所 松村文海堂

